

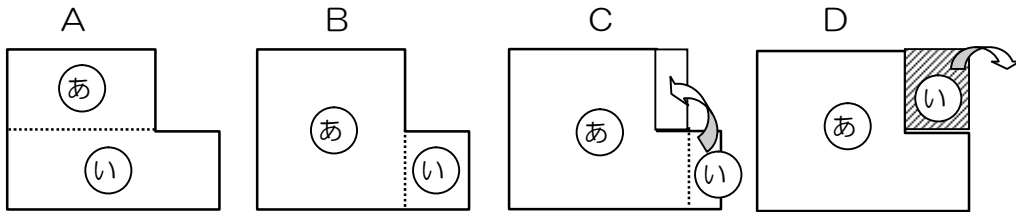
既習事項は、使える既習になるように指導する。

「習ったことを使って解きなさい」とよく言うが、使える既習になるように指導していなければ、無理である。教えたから・習っているから活用できるわけではない。多くの指導案の児童の実態に、「既習をえるようにはなっていない」という記述が無くならない。

では、既習事項が活用できるようになる授業とは、どのようなものなのだろうか・・・

1 原理・原則を発見させる活動を大切に！

例：4年「複合図形の面積」



この交流場面でよく見られるのは、仲間分け・ネーミング等、違いを強調する指導である。

- A・B → たし算、分割法、2つの長方形に分ける方法・
- C → ひき・たし算、切り足し法、切ってくっつける方法、1つの長方形に・
- D → ひき算、足し引き法、くっつけてのける、全体を大きな長方形と考える・

例えば、上述のような違いを中心とするまとめでは覚えることが多くなる。まして、ネーミングするとなると、その名前自身は、今後においてほとんど活用されないにもかかわらず、多くの時間を費やし、思考を混乱させることになる。(特徴を捉えさせるには良い面もある)

標題にあるように、原理・原則を発見させる活動というのは、違いではなく、同じところを見つけさせる活動である。 *関連資料:No.10

- A・B・C・D → 「**長方形に直して、公式で求積する方法。**」・・・**使える既習**

このように、共通するアイデア1つに整理して既習としておくと、未習である三角形・平行四辺形等においても、「長方形に直すことができれば・・・」と、活用しようとする。

2 過去だけでなく、未来に向かう活動を大切に！

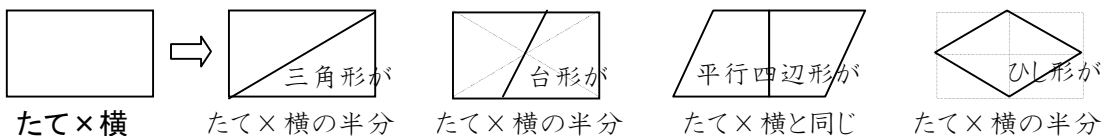
例：5年「面積」

求積公式をつくる学習において、三角形・平行四辺形・台形・ひし形に出合った際には、既習の図形(長方形等)に直すことに気付かせようとする支援が多い。つまり、これは過去に意識を向ける活動と捉えることができる。

一方、未来に意識を向ける活動も大切にしたいと考える。

教えていないことに向かい、解決していくこそ「学習」の成立。

例えば、長方形の求積公式の獲得後・・・これが分かれば、次に何が解決できそうかを問う。



未来に向かう活動とは、既習事項(アイデア)のその場拡張である。9×9までのかけ算九九が分かれば次に(9×10, 9×11)・・・、A+B=Cのたし算が分かれば次に(A+B+C=D)へ・・・